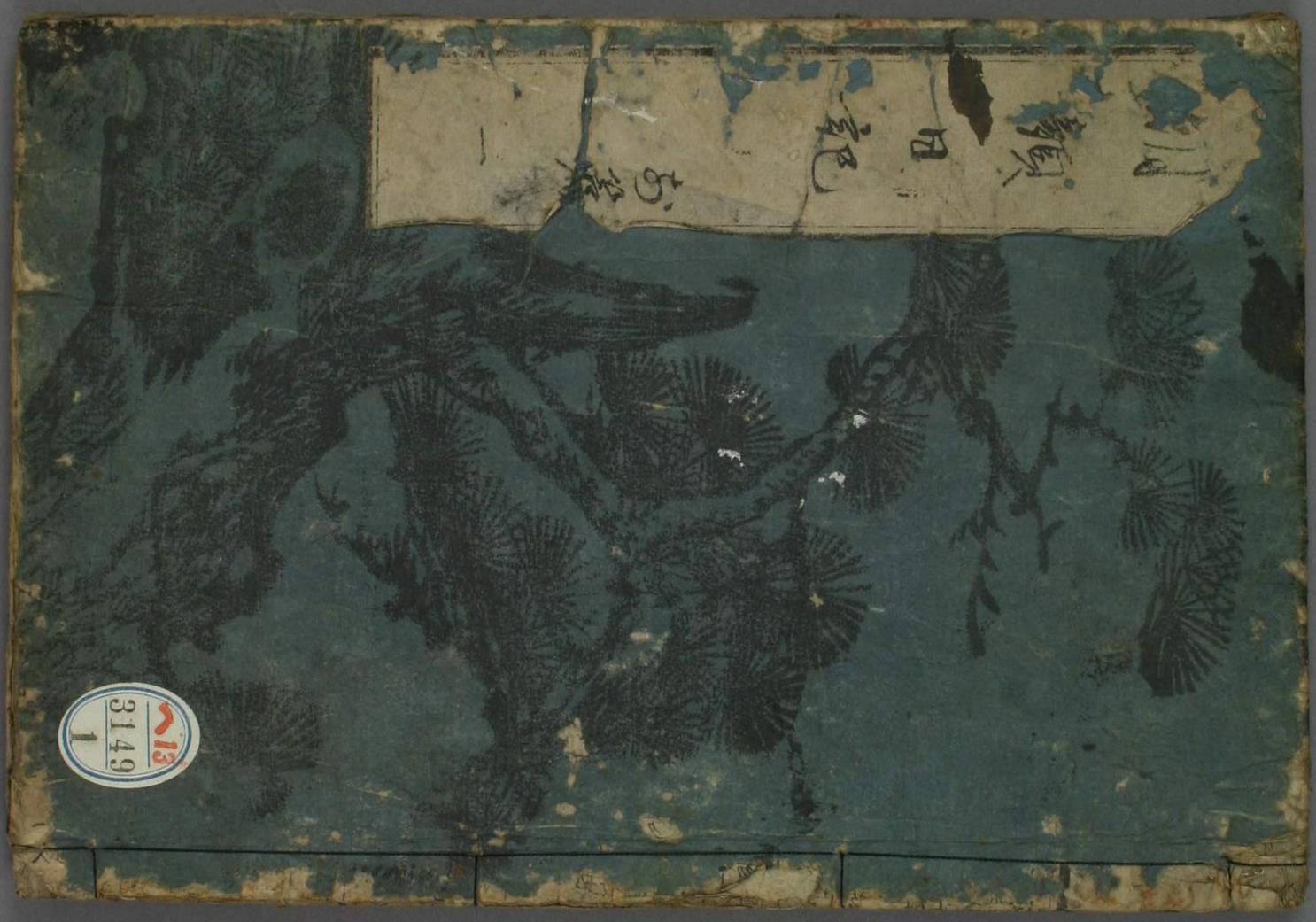
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



ハ13
3149
1

へ13
3149
1-10

へ13
3149
1

○定定品集　巻

柳吐夢清日三竹事上春
芳初確風裏譜
淮河世事三月失
咕咕人之先一取
定龍仙史

仙史東海旅客向去春寓居
于百濟巷也余廬在近是以
數往來唱和于其客舍已知
其有誠今茲辛未春將東
而告別也余之盛久志適脫
葉私意仙史之文詞足緣飾

此書以乞幷言仙史笑而歸明
日復過其寓居窺其帳中閒
而無人遽問主人則曰史已東
矣而柳陰聲語彷彿接其音容
也惆悵可知但見題辭一絶
則春朝晏起〻他情致不可

言之附卷首以遂初志云此舉
余豈無意讀者思量柳浪
識于大阪〻〻述來街

非山維嶽
何靈降神
鍾得其秀
生斯韻人
阿蘇真形圖

文英武

這個賢君

大内方滿興

情色俠

第一花魁

遊君瀬川

或寛或
猛
經
濟
良
弼
子
產
名
花
駒澤春雄
仙月似雪風流標致
文君淫生
澤雪

假悪
惟考
結果
可憐
修驗
伽藍羅院
竹叔翁狼
豈
漏天
網
山岡玄蕃允秀門

青娘才慧
愛惜鸞雛
水青
洛華柳嫩賛
冷泉帶刀為猛
黄八荘
國性
立
鉏
奸

加人芝咲ハ雑劇の作者なり扨のうゑ幕の情
張をはられてその稿一巻を完すして彼の記の跡
乃ち嘉ときこゑぬ咲もとゝ予ハ泥て遊ぶと久し一夕燭く
下ゑの侍者さかゝり来られとよくるの程無ぬれて身
疲きとうもれさるあとしこゝろひ或のそくのすこのうて業の
繁ゆたしなくういつけしら校慧おひぬふりていこしら
七局の舞子となるぬよて朝顔見花と名つけていはゝ度
かはゝるもし我は多きあるものゝ

法忌兩香園主人



朝顔日記目次


○一之巻
一回 雲
二回 花
三回 鳩

○二之巻
四回 歌
五回 螢
六回 蘭

○三之巻
七回 月
八回 服

○四之巻
九回 踊
十回 文

○五之巻

十一田 諫　十二田 暗

○六之巻

十三田 關　十四田 川

十六田 柴　十五田 猫

○七之巻

十七田 蟲　十八田 狩

二十田 毒　十九田 屯

以上

故

芝屋　芝叟　永新　月

花魁　雉子　錦木　梵字　太刀　昆布

鴛鴦　拍毬　朝顔　狗　雲　浪

捏　瓢　賊　楠　燕　水

櫛　禿

朝ごぶの巻　既刊の巻に進く嗣て出す

## 話柄扇名家

無逸　巴隠　延年　西谷　都夕　呆子　一夢
白堂子　其光　鹽嘉　泉鴻　潤鳳齋　吉田　廣谷
久池五　鮮亭（京）　三團　岡吉　葛籠治　莊田　佐伯
大平　安河内　綿鉄（下寺）　一鳳　堂加林　引鶴　桃里
可櫻（粉）　三笑　平岩　扳道　直任　久木本　呂蛤（京）
橘屋（京）　歌友（京馬尺改）　加木（伊勢）　幕屋（吉吉屋）

# 朝顔日記卷之一　故芝叟遺話

柳浪　著

## ○一回　雲

あさがほいうさまゝ　ふされかへてさうひさしれ花よそいうつけ。さまゝ此葬よつけていと愛たる傳奇ふんあるる。當初肥後の國よ宮城廉助春彰といふものあ代々國司菊池殿よ仕て四百石餘の采地ゆたはる影の家隷を扶持し。男女の子寶ふさ冨て。何不足ふき家道ふて。おの廉助緊く隽實の天賦ふるうへ博學のゆまをあるふ。主君菊池殿の御心ふかるひ。いちとやく擢用あて。儒學教授の職ゆ掌とらしめ給へ。夫より廉助ハ日ごとよ學校よ往還て。藩の

子弟に訓導ち。さて此宮城の莊院い菊池川の涓紅鶴林と
いへ地方まり。この菊池川ハ東南のうとるる萬重の山より落合へ
大河にて。逆巻水い巴渦をふし。激怒濤い奔馬よ昊ならず
猡猡蛟螭もをひべくおぞえて。もの凄まーに勢頻なり。後
背よい名たくる阿蘇ゞ嶽高く聳て。絶巔より火煙盡くと燃
あがり。その音雷霆のごとく震とゝき。百道黒煙そだまを
て中天に焦し。時あつて泥とふらし岩に飛を。鷲鵰しこを
ぶたりよ怖のき翔。豺狼もこを恐えておくをふす。周圍の巖壁
い究も削成ゞごとく。雲樹いやゞ上よかさなて。ほぬよ金烏を
呑玉兎に吐く。其高き幾千仞とゝうぎり成ちゝず。まことに
こを十分猛悪げふる山の形勢よて。こを仰げば毛髪を

森竪ぢりふて。ねはひは薩摩の霧嶋。豊前の英彦なんど
世よ聞えたをど阿蘇い禎西第一の名山よて霊異まこと灼然
なり往年征西将軍の宮良懐親王南帝の詔に受て。大明と
隣好に修ひたまひしより通向の使者往来たえせずそのの
ころ明の成祖永樂皇帝より那の山に封して鎮國壽安の
山と崇めたまふとゝや。古記史よ深山大澤龍蛇に産すと紀
て。名山大川の秀氣鍾まり凝を時ーあをバ極て英雄豪
傑に釀ー生をことふん。宮城廉助ゞ渾家い嫩柏と喚るす
ものふて宮司何某ゞ妹まり。この嫩柏婦人ふぐりも其心雄しく
つねゞ良人ゞ經史を講ぞる成聽いるよ感激をるところあを
けん。一個の大願に發ー。景暮たる望かをども。天下國家に

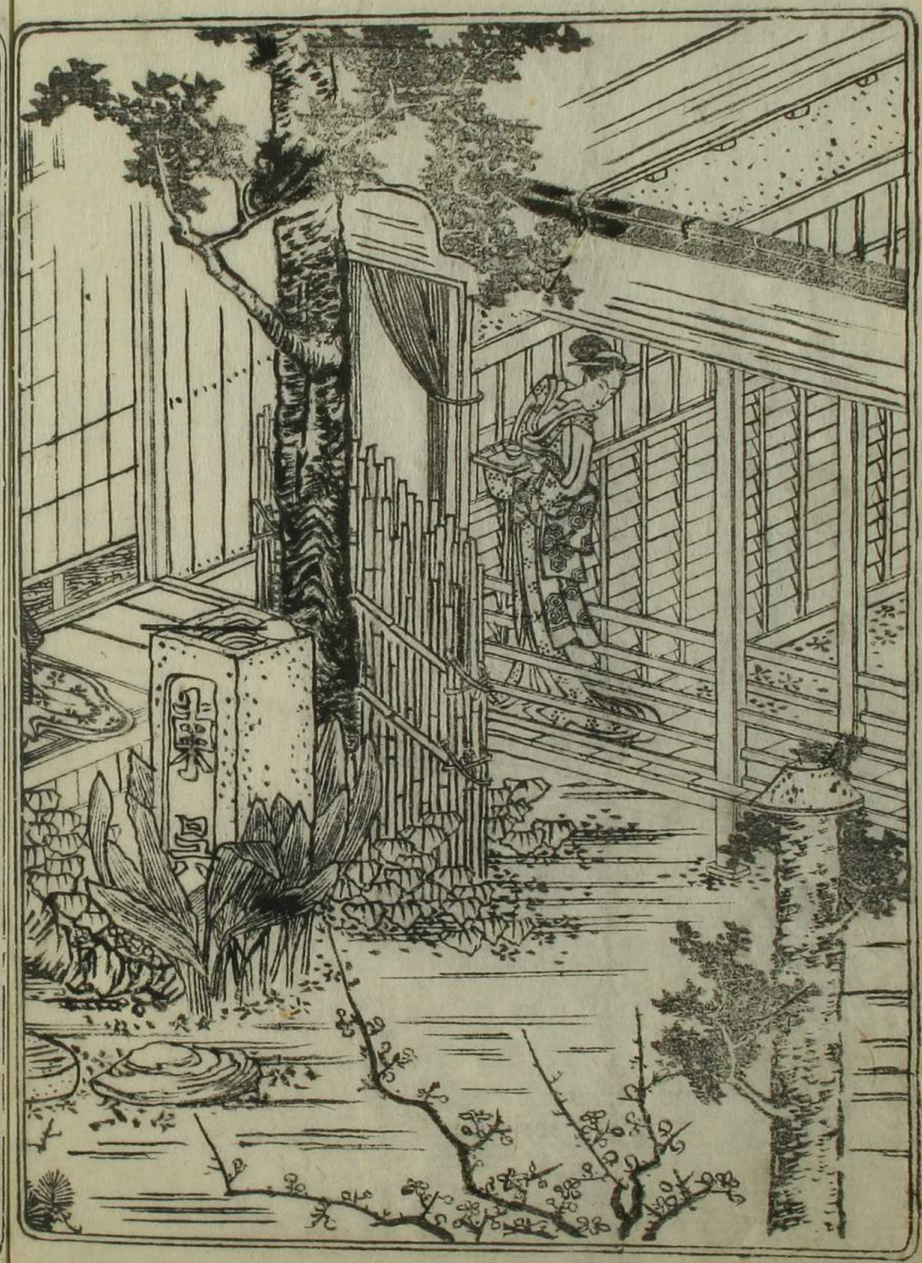
利益をべき一青児ゝ接けたまいまと。岳廟阿蘓權現と願ゝ
奉まつり。朔ふし垢離ゝうき東ゝのぞして遥拝ゝ願丹欵を
凝しこ禱ゝりかくてのち良人廉助五十ゝ過自己四十の坂ゝ登
そめて。不料まゝと雅娠とぞたりふゝる。さとぐふ儒者の妻ゝよし
あをべ胎教とゝふことゝ守て。着帯の月よういまをし言行ゝ
慎しゝ。紡績の餘力ふハ。幼少ものどもゝ膝下ふ集合て忠孝
の道ゝいいきゝせゝる。教もるい学の半といへば。自他のたゝにゝ
功績するべし。かくて嫩柏ハこゝや分娩期ゝ過せど。臨盆べゝ容
子もあられば。自己ハさらふゝ。親屬まで且あやしゝ且あやぶ
む。とゝくして一月二月ハ夢の間ゝたちゆゝ己ふ十五箭月
ふぞふゝふゝる。嫩柏ハゐどし鬼胎とも懐むゝと。安ゝ



てゝろもなゝゝゝ。いつゝその年も晩てゝ。春待前一日ふ
ゝつ。闔家ハ注連かざるハ。逢茅ゝたひいと。のくめゝあひてハし
ゞまし。さのゆ嫩柏ふと陣痛ゝるふぞ。大家慌ふためゝ穩げ
婆ゝ符水ゝとしたさハぐ。一盞茶時ゝうて。陣痛も小止ゝるにぞ
家公廉助ハ茶餌ふふくきゝ指揮ゝをし。柱ゝゝゝきゝ
ゝいいて。おもハずゝうねふゝぬ。そのゝゝ誰といふゝず咄々
起ね。山神降臨まをハと呼ゝゝる驚き。但見きべ。朶の
白雲ふゝうち乗たる。一員の金甲神出現ましゝゝその威
嚴あたりゝ拂て雄偉し。廉助喫一驚。慌忙退去て。席に
額突ゝうちかしゝけふゝ。忽然紙門の裏頭ゝり。呱々と産
声高やゝふあけたるゝ。赤子ゝ似氣まき大音ゝゝ恰好

自鳴鐘も鳴響ハ。五更の一点とまぼしく。人々歡語ていと
執閙なり。廉助おぼえず頭を擡て回顧せバ。山神のかい
らをうせたまひて。初鵲屋角ふたゝびおくふぞ。佐と起て障
子ひらけバ。東天亮くとゞれしあけぐゝのけしきぞ。やとら一
輪の嫩紅のぞゝえて省く御嶽の巔をくふき。一道の白氣こ
の家の破風口より起つて。横さまふ霞霧とたるびき。嶽の
半腹ふたらまうて絶ざるハ不思議なり。光景ゝ。あの
暁誰いゝともなく宮悴大人の莊院よりあやしの白氣たゝ
のぞゝ。そうふし赤子の啼こゑ方二丁ばかりの間ふすえ
ぬい吉怪いうさまさきい神の接たまふ児の産をしゆへふ
るべしと。此界隈の里人もいひあつうとぞ。聽て年がはした

管家婆が赤子を褓褓ふたくるき抱き来り。家公廉助に
見せて慶賀とかゝセバ。廉助悦てこを見るふ。初髪ハ艶
艶しくのび。玉を欺むくをどろごるゞ。眼のさやのこゞれなる
さまよ。よも凡庸ふいあらじ。そふ山神の霊異といひ。久後ハ
國器ふも成べきものふらんと。未たのもしくそもひなるゝ
祥端あるふめでゝ。那の御嶽ふ象どりて乳名を阿蘇松と
名ばけ。ふよおく慈しゝ育る。さきべこの児成長の後縁故
ありて駒澤何某と名を更め。大内家の執政とふて。その君
を賢者と仰がゝ。國を富し民を惠ゝ。まゝ幾十の書籍と
著ハして。世の利益とのこせり。伊人胸ふ韜略を藏し。才ハ経
濟を包唐山ふてい諸葛孔明天朝ふてい青砥藤綱ふもさく



阿蘇山の麓紅鶴林
ゐる宮城薫
助が家小正
月元日麟
児産る時
一道の雲氣
その家より
おこり嶽神
臨凡まして
霊異只ならず、

劣るまじき器量なり。且那の諸葛青砥ふも優て。その標致世ふそぐれ。威あつて猛らず。そよろづの風流ぶさへあしけり。その弱冠しとき。天上の月老いうる奇巧とさけんおろ美姐！一線の赤縄ぶ締しらあるときハ紊あるときハ解て。ゐどし絶こまと續き。後来ものでたく鸞匹の述好と遂年ぬ其根由ハ

爰ぬひろまのいうさかぶて。すはうげれしたをふさふ。

あもれ一村さめのこらしとふをうし。

此一闋の唱歌よういとぐちぶ惹いぐした。

○二回　花

さても宮塚廉助ゐ乙の子阿蘓松ハ影の年月ぶかさね今茲僮十一歳。奇童の聞あるともつて。大守菊池殿より召出さを。今日おん初て執謁ぶふしふける。菊池左馬頭殿ぶたくしをを御覧したまふよ。その顔色容止のあてゐろさま。露をふくめる花よ優千回をゲける玉ふひとしく。あたりも輝煌ぞかてなり。頭殿ちゃく召を。阿蘓松とハ汝よふ。詩作ふんどもふせろよし。今この庭階の風趣ぶ。即興に仕まつをと仰せける。阿蘓松ひをふして上意ぶ畏え。いさくかるびをたる態もふく。五ごろふ五言の絶句ぶたくを。ふう油うち褰げ。雪まず王脆ぶ運らしたく。清く白く繭紙よ一揮と寫完てをを呈ぐ。その字様一個々龍蛇のごとく。墨痕いと白やうう。殿御感るのもなうず。當坐よ二百石の新地と下さを。紅梅影の扈従列よ加へさせたまふ。ををよう阿蘇松

ハ直ニ潭府ニ止まりて。毎日向ふく給事ゝぞもげそる。この
紅梅殿といふ所以ハ。菊池殿ふらく儒道を重んぜらる。賢明
たぐひなく。一個の良臣吉弘市正といふもの有。登庸ひて孰
事とふしたまふ。吉弘ハ二まき忠直の人ゝて。寛猛ふどよく
よつりぶつふりて領分よくたさまり。黎庶總太守の仁德ゝ
ぞ仰きる。この君侯ねね風流ゝ好ませたまひ。御物數奇の
あまり。美貌をぐ也たる児姓十員ゝ召らる。個く緋を穿られ
ふおを襲させて。脂近ゝめしたまふ。ゝを者るもの。
その打扮の華麗ゝ賞。紅梅殿と称せしより。いつとふく
去らいひふらハせしとぞ。此殿の頭領ハ荒尾虎橘とて。當家の
一老荒尾弥平左衛門ゞ二男なり。父ゞ權勢あるふまりせ。日頃

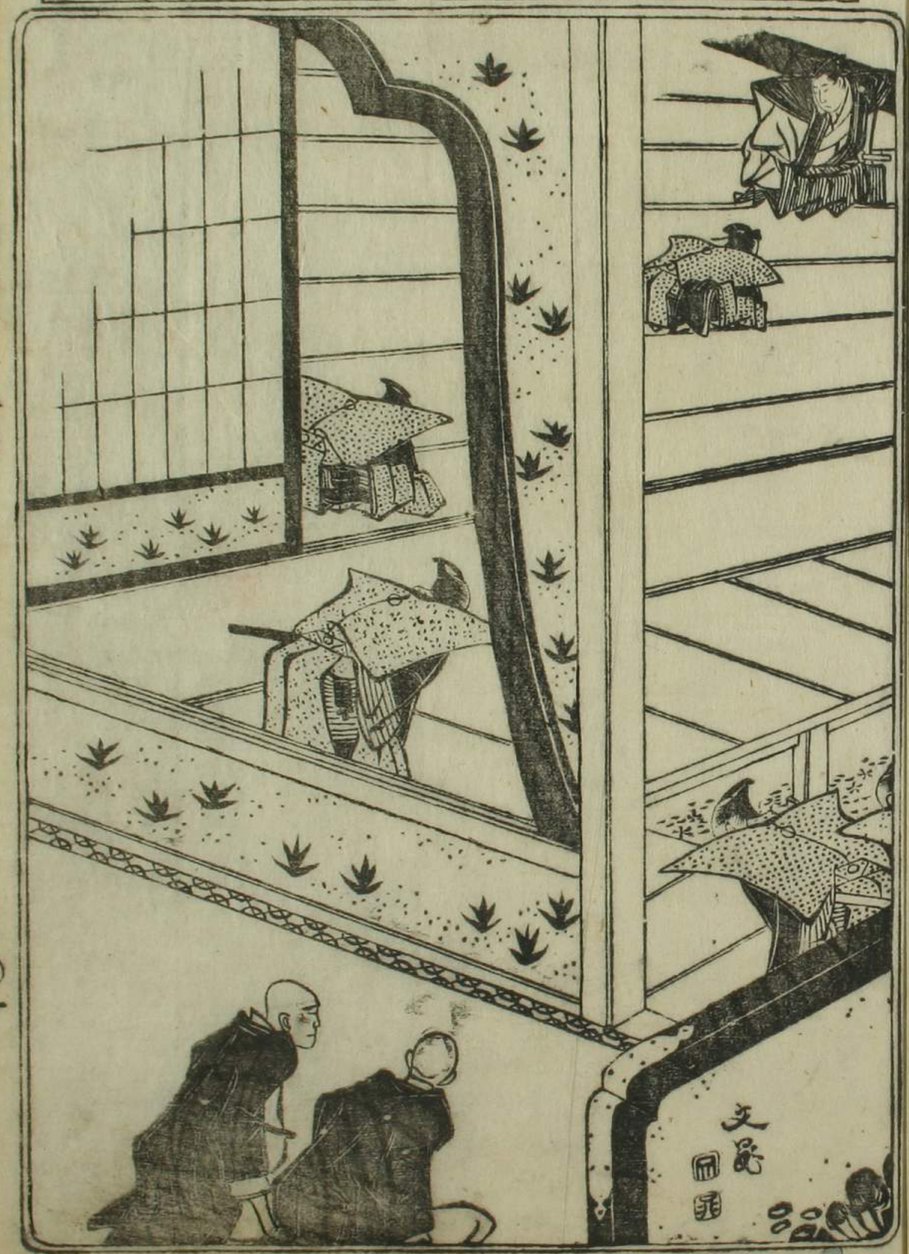
我意ゝほこり旁若無人ゝぞふるまひる。さるゝ新桑の宮塚
阿蘓松。君の恩寵ゝ蒙ふり。ゝきりふ出頭をる猜ゝ。同僚ど
もとゝねね抵誣いひて嘲弄ふせども。阿蘓松ハ生得て老趣
き性ふもゝ。まをゝ激勵ゝ謙選ていつも悖らふことふれば。
那客氣の旁輩ともをせんをべふくて止ぬ。ふのち三四年ゞ間
話なし。かくてのち阿蘓松十五歳。虎橘十八歳ふまりる。今
春ハ當屋形の御先祖武德院殿の御遠忌ふあたまりごきふよ
まて。御香火院水禪寺ゝおゝて。三晝夜の大法會ゝまゝけら
ま。祖君冥福のたゝゝ水陸道場ゝ修せしめらまて。その前後三
日のあいだ。御領内の殺生ゝ禁。まゝ一面ゝハ青錢精米ゝ下行ゝ
まて。貧民ゝ賑したまふ。當日ハ三月十八日とぞことえる。抑も

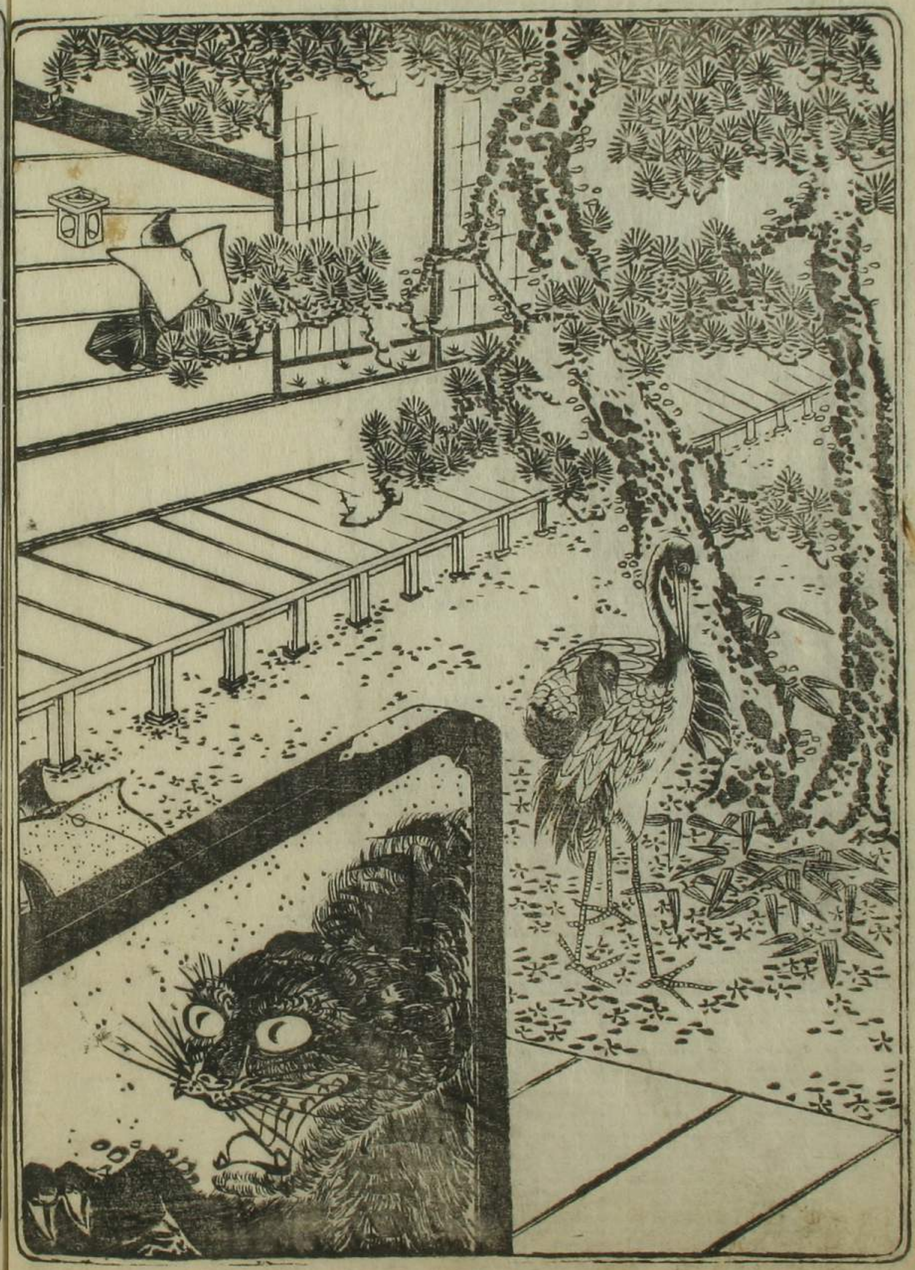
よの寶刹ハ寧一山の開基ふして。代々支那より高僧渡来て。住持せらるゝ。往延慶元年開山寧一和尚。國主の招提ゑ應して下向わり。當國第一の風水好き福地ゑト て。一座の密林ふゝ ゑ山脚ゑ伐闢き。土木の工ゑ悉して草創あるゝ大伽藍なり。宮殿樓閣宏壯と建ちぐき金碧瑟日と相映ぬ。山門の額ハ皓月山の三大字ふて。南帝後亀山院の宸翰なり。後背のかとの懸厓よりハ。一道の瀑布漲ぎるとち。中ゝとなる巖稜ゑ激て段ゑふせバ。わたらも双龍の珠ゑあらそふゝとなやまたる。那邏をべて躑躅山吹ときさだ。藤波もうちゆらゑつ。客殿のさまといそ。欄の砌まて。那の飛泉のゝゞを引入て おはきやうなる池ゑふせり。澄きつゝる水ハ西洋鏡ゑのべたるがごゝ。ゝどゝ五濁の垢ゑ滌ゑたへて。おまゑ照鑑せバ毫髪をもかぞへたべし。水禪の名虚しからで。清浄ゑるさとゝふゝ。

かくてその日ゑ暮りけるべ。菊池左馬權頭武頼朝臣御泰詣ゑて。従者い大伴惣門の下馬場ゑのゝさを。侍衛のものとを具して。大雄寶殿より上せたまゝ。御側室雲居の方ハ。御腰下ゑ簇擁けて仕女たちゑ。總て雪白ゑる裝束ゑ。せとせ浮ひゝる。こい大切成御法の場ゑる故なりとぞ。さの時佛殿の階下ゑ立並たる例の紅梅伴の児姓共と其間遠ゝらねバ一頭ハ紅一頭ハ白一對の美人隊ゑふして正しく紅白の親隨ゑまべ。あるとあるゝ人とゝを ゑゝをゝて喝来てげゝ。知客察ゑハ。法施香資の臺子ゑならべたて。庫裏の側ゑい米嚢山のゝとく積おけゝ。正殿の中央ふる

須彌壇よ。故肥州刺史從四品拾遺補闕武德院殿叙阿大禪定門と寫たる御靈牌ゑまうけ、七寶の卓ふい灰白色ふる。至正銅の瓶子ふ一枝の金花ゑ挿さり。寶鴨ハ奇捕を炷らし。銀燭ハ青煙ゑ吐俎豆ゑ盛たる百味ハ。山海の珍異を盡たり。住持智遠慧長老。勅賜の紫衣ゑ着し。綴錦の袈裟ゑ斜ゑ纏。影の僧侶ゑ卒ひ。珊瑚の珠數ゑまぐりけ。恭く霊牌ゑ向ハせらきて。讀經のこゑいと殊勝なり。ふのときゑ右左ゑ排列たる緇徒たち。種々の具ゑおらして。法樂と奏せらるゝふぞ。さしもふひろらうる殿上。ひつそとまづまり。物の音いとゝいたうをゝこゝろ。天人も花ゑ雨をべく。そゝろ形る人もものあハきをて。ほどし深淵のあわるさくちす。やく時ゑ移して。法會うたのごとく修のひ完ぬ。この時梵鐘殷殷と響法鼓鼕々とふゑわたるゑぞ。ゑや日中といふらきる。菊池殿ハ智遠長老の誘ふひゑ應て。書院の上段ゑ坐ゑしめらき。ほくゝと眺ゑたしたまへバ。客殿の造ざま修らいざまハさらふもいゑず。庭の砂子も玉ゑ磨たらんやうれるゑ。池の鎖のどうふ霑ゑたりて。まゝ灰ゝれる木末どもの。さうゝきたこころれるふ。いとゝいたうけしきゝ。ゑたいきろ櫻花ハ。枝もたハむぞうゑふさゑそだきゝり。翠簾の外よりい和暖うゑふちふく風ゑえれらず。旬たるけしゑ。寫さゝゑといゝん風ゑあゑて。いまや散もはじめず咲ものこらず。いとゝもむきふくぞゝえゝり菊池殿一坐ゑ屹と見ゑたしたまひて。香爐峰

肥後の國司菊池左馬權頭殿宮城蔵助が児孫阿蘇松が奇童の聞あるゆもつて、徳前小召おされ、詩を作らしめて、その才を試たまふ





の雪ハいろふと仰せけるふ。御側ちろく侍坐せる群臣誰あつてその意ゑ解をろものなく。個々顔見あはせて呆まきゐたり。菊池殿いと没興げなこたびハ御聲高やうゐ。香爐峯の雪ハ如何と呼ぜせたまふゑ。遠侍なる在ける、御児姓宮城阿蕪松上意ゑうち聞半晌御前の動静ゑ覘ゞひしゞ人々全然舊のごとく。黙坐して。あへて一語の回答ゑ票しあぐるものもなくて。泥梨を居たるやうなり。阿蕪松ハいと不堪技癢おもひ。そのまゝ法いと紀て茶道風也ゑ呼び。和主をやく御覧遊ゝるあの鈎簾とハ。高々と捲上ゝるべしと耳語ゐ風也ゝるゑ得て。そのまゝ膝行落掾ふいたり。おほよそあいひ三四間ばゝり簾子をとり除けバ。忽地天亮たるがごとくそこらあゝしとゝをやゝふゝたりまさり。綻そだまゝる櫻花どもの梢のかざりなどふく見えて。今一入の興ゑそへさせたまふ。菊池殿。そゞめ簾子ゑ隔て。御透見あらせらましゝかどハ。何とやらん。水月鏡花の御ゝちふて。いと眺めうくおぼしけるふ。いはゆ阿蕪松がいちそやく心ゆき。簾ゑまゝせしその才の敏しゝゑ御感賞ありける。長老をおぼえを如意もて膝ゑうち。さてし宮城氏の子ハ希代の才人ゝふと。頻ゝ称賛して止たまハず。さまどふゑ坐中にいまだ。その意ゑ解しえざる面持なるふそ。長老御前ふ對ひて。君候知召ぶとく。唐の白樂天ゲ。遺愛寺鐘歌枕聴香爐峯雪撥簾看とゝ絶唱あり。天朝ふてハいづまの天子

のおほんときふゝ。雪のいと高くふりける日、便殿に出御ふそ
今のごとく香爐峯の雪ハ如何と詔ありけるふ玉座ふ侍づ
ける公卿衆。いまゞ天意ふ會せゞして。志ゞし躊躇ふ[illegible]
も。宮女清少納言。いちもやく起て、玉簾ふ褰げあげらゞし。
故事と符節ふ合せたる頓智ゆゑ、そゞハ女流こゞハ人。
今昔といかくゞども。をろともふその才惠ハ姉ふまと。例ふ
ひきて稱賛たまへバ。頭殿よをゝ御氣色うるハしく。其
ゆゑ阿蘓松ふちかくゆさゞいそゞく出来せまとの上
意ゆて。差換の御佩刀ふ御手ぞら賜ま、渠ゞ發明ふ
ぞ賞したまふ。よをふよりて阿蘓ハ、ゆからず面目ふ
ほどこしゆゞさゞバ此事ふ聞傳て。御供前のうちゆい。